牛ウイルス性下痢・粘膜病の清浄化を目指す農場と地域の対策

中央家畜保健衛生所　稲垣美里（いながきみさと）　新井澄江（あらいすみえ）

【はじめに】

牛ウイルス性下痢・粘膜病(BVD)は、下痢や呼吸器症状、異常産、致死性の粘膜病を引き起こし、農場の生産性に大きな影響を与える。特に持続感染牛(PI牛)は農場内に潜伏し感染拡大を招く。そこで今回は、PI牛摘発淘汰によりBVDの清浄化を目指す1農場の事例と地域の対策について報告する。

【発生概要】

平成27年9月、搾乳牛約300頭飼養農場においてPI子牛が摘発された。当該農場では、以前より育成牛の一部を他農場に預託する形態を取っていた。国の「BVDに関する防疫対策ガイドライン」に従い検査を進める中で、合計6頭の子牛が摘発淘汰され、平成29年4月に清浄化した(第Ⅰ期)。しかし、同年9月に再びBVD感染子牛が確認され、平成30年5月までに合計4頭が摘発された(第Ⅱ期)。

第Ⅰ期では、摘発子牛6頭の各母牛のうち4頭が預託先、2頭が農場内での妊娠であった。場内母牛群でPI牛は確認されておらず、母牛が妊娠期間中に農場内外でウイルスに暴露され発生に至ったと考えられる。第Ⅱ期では、摘発牛4頭のうち3頭は子牛、1頭は外部から導入されたPI経産牛であり、それぞれに親子関係はない。PI経産牛は平成29年3月に導入されたが、導入前に検査未実施であった。本経産牛の導入から摘発までの期間が、PI子牛3頭の妊娠期間と重なっていたことから、同牛が第Ⅱ期の再発原因であると考えられる。

【対策】

当該農場の対策は次のとおりである。①新規導入牛は必ず遺伝子検査を実施し、外部からの持ち込みを防ぐ。②飼養衛生管理を徹底し、農場内感染を防ぐ。③モニタリング検査を実施し、母牛の野外感染の有無を確認する。

地域の対策として、以前より家保から地域酪農家に対しBVDの危険性に関する説明を実施していた。再発後、発生農家の要望により地域の全酪農家を集めた会議で事例を紹介し、BVD対策の必要性を啓発した。その結果、地域酪農団体を通して農家から検査希望があり、全酪農家20戸のバルク乳遺伝子検査により母牛群の陰性を確認した。現在では、地域全体の感染状況を把握するため、全酪農家が定期的なバルク乳検査を継続し、結果を共有している。

【まとめ】

当該農場では、平成30年5月以降PI牛は確認されていない。今後も対策を継続し、来年度の清浄化を目指す。また、牛を導入する際には検査を受ける等、地域全体の防疫意識向上が見られた。今後は各農家に合わせた検査頻度を提案し、さらなるリスクの低減に努めていくとともに、管内の他地域でも普及啓発し、BVD対策に取り組んでいきたい。